

先日、お葬儀をすませたご門徒が、ご家族揃って、お寺にお礼に参られました。

四十九日法要の日取りですが、親戚の者から、「四十九日法要が三月にかかるとうと良くない。と言われたので、三十五日で法要を行ないたいのですが……。」との相談を受けました。

亡くなる日のタイミングによっては、四十九日を数えると三カ月に渡る場合があります。

例えば、七月十七日に亡くなれば、四十九日目は九月三日になり、七月・八月・九月と三カ月をまたぐこととなります。

これを「三月またぎ」と言って、縁起が悪いと考えるのですね。

「三月またぎ」が縁起が悪いその理由ですが、

三月(みつき)→身付(みつき)→身に付く

四十九日と合わせると、「始終苦(49 しじゅうく)が身(3 み)に付く」として、亡くなった日から四十九日法要まで、月を三つまたぐのは縁起が悪いと考えられるようになったからです。

月の半分より後の日で亡くなりますと、たいていの場合、四十九日の法要は三か月間にまたがってしまいます。

四十九日の法要が三ヶ月にまたがることで苦勞が私の身につくことを恐れて、四十九日の法要をわざわざ切り上げて三十五日で勤めないといけないという迷信的習俗が、まことしやかに伝わっているのです。

日本人は縁起を担ぐ人が多いのでしょうか。語呂合わせを気にする人もそれなりにいます。

数字の「4」と「9」を極端に嫌ったりしますよね。例えば病院の部屋番号に4や9が使われないことがありますね。

この不吉である理由としてよく言われるのは、「4」という数字を「し」と読むことができるため、「4=し=死」と死を連想することができるためです。

9も同様に、「9」は「く」と読めるため、「9=く=苦」と苦しみを連想するためです。

なるほどねえ。想像力豊かですね。

4や9の数字、日本語の言葉の発音が「死」や「苦」を連想するから避けているんですかね。

日本では4と9の数字が特に嫌われています。「不吉な数字だ」・「使うべきではない」・「目にするのを避けるべき」と忌みはばかって使用を避ける傾向があります。

忌み数というのは単なる言葉の響きによるイメージです。

ですので4は「し」と読むことができるから不吉だというのはおかしい話です。

例えばこんなことがありました。

病院で「473号室」に入院することになりました。

ある人は『その部屋は縁起が悪いから変えた方がよい』と言い、ある人は『こんなに素晴らしい部屋はない』と言いました。理由はこうです。

前者は、473を『よう、なおさん』。治すことができない。

後者は、473を『しなさん』。死なさない。

同じ数字であっても、読み方や発音を変えれば、ものごとを正反対の捉え方をすることができます。

数字に良い悪いというのはなく、人間が自分の都合の良いように悪いように感じ、迷いやすい生き物であるということが言えます。

四つ葉のクローバーだって、希望や幸運の象徴としているけども、なぜですか。

3や4の数字そのものに吉凶はないのです。人間の都合によって4を幸運の数字にも扱ったりします。

今日は人が亡くなって納骨するまでの間、四十九日。なぜ四十九日なのだというお話をさせていただきます。

そもそも、なんで四十九日なのですか。「三十五日でもいいのでは」とか。

「中途半端 五十日でもいいのでは」とよく聞かれます。

「皆さんいかがですか」四十九日はただ四十九日という日を決めたのではなくて、これには、理由がございます。

古代インドでは人間は輪廻転生すると考えられていました。

それを誕生の瞬間が生有（しょうう）、生きている期間が本有（ほんう）、死の瞬間が死有（しう）、死んでから次の生を得るまでの期間を中有（ちゅうう）と呼び、中有は四十九日間といわれます。

極善の人は、すぐに天上界へ生れ、極悪の人は地獄へと、すぐに行き先が決まります。

しかし行き先が決まらない人は、次の七日目に、良い人は割合と良いところへ、悪い人はそれなりのところへ行くことが決まります。

これを初七日といいます。

それでも決まらないものは、次の七日目、二七日で行き先が決まります。

それでも決まらないものは三七日、四七日、五七日、六七日と、そして七七日の四十九日で行き先が全部決まると考えたのがインドの考え方なのです。

これを前の生と次の生とのまん中なので中陰（中有）と呼ぶのです。

そして、この中有の考えと中国の道教の思想が混じり合って「十王経」が成立します。

その中で、死者は7日ごと、百ヶ日、一周忌、三回忌に十王の審判を受け、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道のいずれか決定されると説きます。

要するに、四十九日の間に死者の行き先を決める裁判が開かれるというわけです。

第1審 地方裁判所に相当するのが、「初七日」、高等裁判所を経て、最高裁判決が下されるのが「四十九日」ということです。

住人の王様の判決を下る日をめがけて、善根功德（よい報いを招くもとになる行為）を送ることによって、亡くなった方が少しでも善いところへ行くようにと祈っていくことを追善供養というのです。

居並ぶ裁判官の中で、いちばん有名なのが閻魔王で、五七日（三十五日）に登場します。

その裁判は、この世の法廷と同様の手続きがとられ、いきなり判決が下されることはありません。

まずは、罪状認否（検察官による起訴状朗読が行われ、裁判官による黙秘権の告知と、罪状認否と呼ばれる被告人と弁護人の陳述に移ります。）から始まります。

そこでは閻魔王が、エンマ帳に記載された行状を糺（ただ）します。

閻魔王の前では、いっさいの罪を隠すことはできません。

いくら「記憶にございません」で通しても、再現ビデオ付超高精度ウソ発見器（浄はり鏡）ですべて暴かれます。

浄玻璃鏡（じょうはりのかがみ、じょうはりきょう）は、閻魔が亡者を裁くとき、善悪の見きわめに使用する地獄に存在するとされる鏡である。

「じょうはり」の漢字は浄頗梨、浄玻黎、浄婆利なども当てられる。業鏡（ごうきょう）、孽鏡（げつきょう）とも。

閻魔王庁に置かれており、この鏡には亡者の生前の一挙手一投足が映し出されるため、いかなる隠し事もできない。主に亡者が生前に犯した罪の様子がはっきりと映し出される。

もしこれで嘘をついていることが判明した場合、舌を抜かれてしまうという。

一説によればこの鏡は亡者を罰するためではなく、亡者に自分の罪を見せることで反省を促すためのものともいわれている

それも 身体だけでなく、言葉や心の中で犯した罪まで問われるのですから、たまりません。

「被告人」は大ピンチです。

そこで、遺族が裁判の日に、被告人支援のためにお経を読んで「情状酌量」を願う…というのが七日ごとの仏事になります。

そして最高裁判決の日（四十九日）には、親戚まで招いて大応援団（法事）を組むわけです。

ここまでが、一般的にいわれる四十九日です

この後、百カ日・一周忌・三回忌と再審請求して成仏を目指すことができるので、四十九日までの七回と合わせて 十回ほど、裁判官（十王）の前に立つことあるわけです。

ここまでが「十王経」で説かれる四十九日です。

浄土真宗の四十九日

阿弥陀如来さまは、この私をすくうために、すくいの対象である私を 事細かに見尽くされました。

それは、私自身さえも気づくことも、知ることもなかった、「ほんとうの私」です。

そして、その「ほんとう私の調査結果」は、絶望的なものでした。

「ちょっと善いことをしても、相手から認められないと腹を立て、あけても暮れても損得ばかり。努力（修行）したらしたで、それを踏み台にして すぐ威張る…」閻魔王の判決は、間違いなく「地獄」。

どれほど遺族が応援（追善供養）をしても、有能な弁護士（仏さま）をつけても、とても無罪（すくわれること）はありえません。

見事なほどに、どうしようもない結果です。

しかし、そんなことで投げ出すような阿弥陀さまではありません。そんなすくわれようのない私をすくう方法を阿弥陀さまは、とてつもない長い時間、頭を抱え、考え抜かれました。（お経には 五劫思惟とあります）

そして、その結論。

朝から晩まで地獄の種をまく私をすくうのに、裁判に臨んだら到底 勝ち目はない。

それならば、裁判の前に私をすくいとってしまおう。死んでからでは間に合わない。生きている今、この時に おさめ取ってしまおう・・・と。

そのために、自ら地獄へ墮ちるしかない私の罪や煩惱をそのまま、逆に浄土へ生まれるエネルギーに転換させるという、あたかも逆転サヨナラ満塁ホームランのような、南無阿弥陀仏（お念仏）を成就させて、この私に届けて下さったのです。

ですから、ナムアミダブツ…とお念仏する者には、七日ごとの裁判は、無縁です。

死者の行き先を心配をして、追善のための仏事も意味がありません。

このように、閻魔王の法廷に立つことなく、浄土へ生まれさせていただく私たちには、四十九日の仏事の意義もまた 異なってきます。

先立たれた方は、阿弥陀さまの浄土へ往生され、私を導くはたらきとして、私が地獄に迷うことないように心配して下さいます。

ですから、こちらから故人の追善（心配・応援）のため仏事をするものではありません。

四十九日というのは、亡き方が遺族を心配して「お念仏にあっておくれ」と、我がいのちを懸けて用意して下さいご縁と受け止めたいものです。

中有は、中陰ともいいます。

まず、亡くなってから四十九日までの四十八日、ここを中陰（ちゅういん）と申します。

そして、四十九日目のことを満中陰（まんちゅういん）と申します。

亡くなったその日から満中陰の四十九日目、その前の四十八日は満ちていないことになります。

じゃあ、何が満ちていないのかと。

それは、実は中陰とは陰でもなければ陽でもないという、中ぶらりんだという意味です。

そう申しますと、たいがいの人が「あー、やっぱり亡くなった人が、中ぶらりんなのだ、だから亡くなってから一週間ごとに初七日、二七日、三七日、四七日、五七日とお経を、あげて、亡くなった人を供養するのだ」と、ほとんどの方がそう申します。

亡くなった人は、諸仏と、真宗は申します。即得往生、亡くなって息を引き取った途端に仏だと。

ゆえに、亡くなった人が、うろうろと迷っているはずはないのです。

じゃあ、四十九日間中ぶらりん陰でもなければ陽でもない。

地面に足がつかないでいるのは、誰かと云うと、それは、とりもなおさず残った、私も含めてシャバに居るすべての人を指しています。

皆さん方も、私も、弔辞というのを聞いたことありますね。

その弔辞は、生きている私が、亡くなった人に送る言葉です。そして、その弔辞の最後に、必ずこう付け加えます。「どうぞ安らかに眠りください」と。

どうでしょう。「眠れ」と云うのですよ。

それも「安らかに」。「出てくるな」って、この言葉をテレビなどで聞くと、いつもおかしいなと思うのです。

「今晚、恨めしい顔をして私の夢枕に立ってくれるな。どうせ立つなら、隣の憎いじいちゃんの頭の上でも立ってくれ」と。

「安らかに眠れ」「起きるな」と云った同じ口が、自分の家で不幸な出来事とか、困ったことなど、問題が起きると、お仏壇の前や、お墓へ行ってもこう云うのです。

「どうぞ、見守っててください」と。

勝手な話でしょ。

自分の都合のいいときは「安らかに眠れ」と。都合が悪くなると、「起きて見守れ」って。

そして、もっとすごいのは「人が死んでしまったら、なにも出来ん、終わりや」って云うのに、その亡くなった人に「助けてくれ」と云うのです。

勝手な話なのです。

自分の努力が足らんとか、そんなことは一つも云わない。

揚げ句の果てには、その嫌なことが、先祖のたたりとか、先祖が悪いとか、みんな先祖に、なすりつけてしまう。これが、私たちが中ぶらりんで、うろうろしているいい証拠です。

もう一つ例をあげると、自分のおじいさんが、大きな山とか、広い田んぼとか残してくれた。今は、大きな山があつたり、大きな田んぼがあつても、それこそ、いろんな経済的にお金を生みません。

持てば持っているだけ、いろいろ経費が掛かって大変になる。「うちのおじいさん、でっかい山とか、田んぼ残してくれて、ほんとに、ろくでもない、何にもならん。ただ広いだけで」と云っていた人が、その大きな山と田んぼに、大きいスーパーのジャスコとかイオンとかが来たり。その残した山と田んぼに新幹線が通るようになった。

大学が来た。

毎月大きい、お金が入るようになった。

途端にこう云うのですよ。

「うちのじいさん、いいじいさんやった。じいさんが残してくれたおかげや」って。

私の都合のいいように、なっただけの話なわけですから。そう思うのが駄目だと言っているのではないのです。それが私たちの姿だということです。

中ぶらりん、だからこそ、実は、この中ぶらりんの姿の、私たちがしっかり地面に足をつけ、私たちに気付かせて頂けるのが、この四十九日の期間なのです。

ここに、仏教用語で六道（ろくどう）という言葉があります。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天という六道。

ものの本によりますと、人間死んだら、この六道に入ると言いますが、実はそうではないと思うのです。

この六道は、生きていて、われわれの人の心を表すものだと。

簡単に申しますと、

○ 地獄とは、人と争う心、戦争を起こしたり、けんかしたり、人の悪口を言ったり、人を憎んだりする、地獄です。

○ 餓鬼とは、物をむさぼる心。「まだか、まだか」と。給料十二万円。あと三万円あつたら十五万円になる。十五万円もらつたら、それでいいかと思えば、あと一万増えたら、わしの小遣いが増える、など。これ、どれだけいってもきりがありません。たとえ億のお金をもらつても、何千億と稼ぐ者が「まだか、まだか」と、物を食べる。

また、女性の人を例に申すと、申し訳ないですけども。食事に行つて食べて「あー、もうおなか一杯食べた、もう食べれない」って云いますが、自分の大好きな甘いケーキが、出てくると、こう云います。「これ、別腹」って。別に、腹が二つあるわけでない、一つしかないのに、これが餓鬼。

○ 畜生とは、たとえ親と兄弟、血を分けたものでも、時と場合によっては、ねたんだり、疎(う

と)んだり、憎んだりしてしまう心。これが畜生。

○ 修羅、これが誠にやっかいな心です。

皆さん、想像してください。今、自分の一番大事にしている方が、北海道旅行に行っておられます。今日、北海道から飛行機に乗って、小松空港に帰ってまいります。テレビを見ていたら、テロップで北海道発、小松空港着の飛行機が事故を起こしましたと、流れてきました。さあ大変です。急いであっちに電話、こっちに電話、どうやら自分の大切な人が乗っている飛行機でなかった。さあ、出てくる言葉は十人いても、二十人いても、必ず、この言葉が出てくるはずなんですよ。「あー、うちのお父さん、乗ってなくて、よかった」「あー、うちの娘、乗ってなくてよかった」と。

愛情あるゆえに出てくる言葉ですけれども、よくかみしめてみてください。

恐ろしい言葉なのです。

何千人死のうが、何万人死のうが、構わん。

自分の愛する人が、そこにいないことを、心底喜んでしまう。

今、ここに、その飛行機に乗って息子さんを亡くした、お母さんがいても。その手を握って、「あー、いとおいしい」。そう言って流してあげる涙も、本当に心からお悔やみを言って流す涙です。

でも、その涙を流しながら、それでも、その飛行機に乗っていなかった、私の娘が生きて居ることを喜んでしまう。これが修羅です。

ゆえに愛情と修羅は、一枚の紙の裏と表。同じものだということです。

○ 人とは、愚かさ、過ち。

○ 天、有頂天になる、のぼせ上がる。

これが、我々の平生業成（へいぜいごうじょう）の姿だと。

一品一葉、同じところがない。

こっち向いたら人になる、こっち向いたら餓鬼になる、上を向いたら畜生になる、歩いたら修羅になると。

この六道のところを、ぐるぐる、ぐるぐる回っているだけの姿が、われわれの姿です。

だからこそ、お釈迦様が生まれて、すぐ七歩、歩いて天上天下唯我独尊)と言った話が残っています。

いくらお釈迦さんが立派な人でも、生まれてすぐ歩いて天上天下唯我独尊)と言うはずがないのです。

でも、その話が残っているというのは、その話の中に、きちんとした物事の教えが隠されているのです。

つまり、今の場合は七歩目を歩いたというところに意味がございます。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、この六道からどうぞ一歩出た世界に皆さん、おいでくださいという。

じゃあ、この七歩目はどんな世界か。空を飛べたり、未来が分かったり、金もうけがうまいこといたり、自分が、うまい目にあったり、人の心を操(あやつ)れたり、そんなようなことではございませぬ。

今、自分が、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天のどこにいるかが分かるという世界です。

そう言うと、ほとんどの人が「そんなこと分かったって何もならない」と言います。

でも、今、自分が、餓鬼に落ちてると分かれば、今、ものが欲しい、これが欲しい、むさぼっていることが、「あ、これは餓鬼の心や」と分かれば十回に一回、二十回に一回、それをたしなめることができる。むさぼることを、やめることができる。

また、自分を反省することができる。

今、この人に投げ掛けた言葉が修羅の言葉と分かれば、十回に一回、二十回に一回、その言葉を飲み込むことができる。

そのことを云わずにいることができる。

また云ってしまったら「いかんかったな」と反省することができる。

つまり、自分が、今この六道のどこに居て、そして、反省できる心を持つことが、実はこの七歩目の世界です。

お経の中に「慚愧(ざんき) 無き者は人にあらず」という厳しい言葉がございます。

「慚愧とは」血の涙を流して後悔するということです。それくらいのことがなければ人は、人に優しくも、人として成長することも出来ないということです。

初七日の間に、私の心の内に潜む地獄を学びました。
二七日の間に、私の中に潜む餓鬼も分かりました。
三七日の間に、なるほど私の心の中に畜生の心もある。
そして、四七日には「あ、修羅の心もあるな」と。
そして、七、七、四十九日目に、あー、なるほど、確かに私の心の中には地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の心が宿っていると。

初めて分かったときに人は、反省できる心を持ち、地面にしっかりと足をつけていくことができる。
そのことを先に命を失った人の縁を頂いて、その人が生まれて、生きて死んでいくという、そのことを見て、自分もいずれ死んでいかねばならん身であるから。だからこそ、きちんと地面に足をつけていかねばならないという、その期間が、実は四十九日までの中陰という期間です。

その期間を別名「精進」とも言います。
精進とは、実は鍛(きた)えよということです。
仕事に精進せよ。武道に精進せよ。学問に精進せよと。
それは、わが身を鍛えていくということになります。
中ぶらりんの私を四十九日の満中陰がくるまでの間、生まれて生きて死んでいかねばならないという、生きて命のある者として、どうすることもできない。
その自分の一生を、今一度、きちんと地面に足をつけて生きていくことを考える期間が、実はこの四十九日の中陰の間の期間でございます。

それは、なにも自分の身近な両親や自分の子どもや、親族だけの死に当てはまるものではございません。

自分の知り合い、自分の縁ある人が亡くなったとき、その度に、考えていく。そうしなければ、我々は、すぐ忘れてしまいます。私もそうです。

出合う度に、出合う度に、もう一度そのことを考えていく。そのことが大切なのです。
今日は、「四十九日とは」というお話でございます。ただ、ただ四十九日という、その数字があるのではないということを知っていただければありがたいなと思っております。
ありがとうございました。

そして仏様の願いの言葉によって、自分のいのちの行方をはっきり知らせたいいただくことなのです。
生まれてきたものは必ず死んでいくのです。
親しい人の死を通して、私が死ぬということはどうなることなのかを学ぶ尊いご縁となるのです。
「亡くなった方は不幸になったのではない。お浄土に生れて、仏様となっていかれたのだ。」と"いのち"の行方を知らせてもらうのです。
そして逆に、仏様となるものが、今生きていることが、どういうことなのかを、逆に問われているのです。

浄土真宗の教えは、私の願いをかなえてもらう宗教ではありません。逆に私が阿弥陀さまから、尊いものとして願いをかけられている存在だということなのです。

親鸞聖人は『歎異抄』に、「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。」と追善供養の考え方を否定されます。

第一に私自身が人に回向するほど善根を持っているのか。

自分で自分を救うことのできないような人間が、人に善根を施して救うことができるような身ではな

いということが、親鸞聖人の考え方です。

死んでから人に善根功德を施してもらって、悪道を逃れようとするのはおかしいといわれるのです。

それでは浄土真宗では、中陰は何のために行われるのでしょうか。

それは一つ一つには、遺族の心の傷を癒す儀礼であります。

死に別れた家族、親しい人はずいぶん心の傷を受けています。まして子どもが亡くなると、大きな傷を受けます。

そんな時に人間の言葉は慰めても結局はむなしく感じるだけです。その人間の言葉が届かなくなった世界を支えてくれるのは「一緒にお念仏を称えさせて頂きましょう。一緒にお経をあげさせて貰いましょう」と言うだけなのでしょう。

お勤めをし泣きながら、読経の尊さを、このたび深く感じたことはありません。

四十九日のことを「満中陰」（まんちゅういん）というように、百カ日のことを卒哭忌（そつこくき）と言う場合があるそうです。

卒とは、「おわる、終える」、哭は、慟哭（どうこく）という言葉のように「大声を上げてなげき泣く」という意味です。忌は、ここでは「仏事」という意味です。

つまり、卒哭忌とは、「なげき泣くことを終える 仏事」ということです。

大切なあの人を見送ってから、百日がたちました。あの日以来、涙が乾かぬほどに泣きなげいてきましたが、いつまでも泣いてばかりはいられません。今日からは、前を向いて、お念仏の中に亡き方と共連れの道を歩んでいきます…そんな思いの仏事です。

思いますに、百日という期間は、人間にとって新しい環境（状態）を受け容れるために必要な時間なのかもしれません。

4月にふるさとを離れ、進学・就職した若者が 5月病といわれるホームシックを越えて、7月ころ（百日過ぎ）には、すっかり現状に順応していきます。

誕生した赤ちゃんの首がすわり、母体が元に回復するのも、やはり「産後百日」といいます。身一つが母と子の身二つになってから、それぞれが適応するのが百日なのです。

同様に、「親しき者の死」という事実を引き受けるのもやはり百日かかるののかもしれません。泣いて泣いて涙が枯れるまで泣いたら、少しだけ前を向いてみませんか。日にち薬も百錠 飲まれましたね。

どうか、お念仏の中に 亡き方と共に人生を歩んで下さることを念じ上げるばかりです。

ですので「四十九日（満中陰）は3ヶ月に渡っても問題ないよ。ただし、私の話を聞いてください。」この様に、前置きをして、浄土真宗の満中陰法要の意味と、迷信がいかにか人を迷いへと導き、やがて苦しみの種となるかを話し、そのことを誰より悲しまれるのは、お葬儀を済ませたばかりの故人ですよ。と付け加えました。

浄土真宗では、中陰法要にしても、満中陰法要にしても、けっして、追善供養や冥福を祈るための法要ではありません。

肉親の死を目の当たりにした悲しみの中から、故人の遺徳を偲ぶとともに、これを縁として、私の人生の拠りどころとなって下さるお念仏の教えを聞き、阿弥陀如来様への感謝の念を深めるための行事です。

お経の意味を学んだり、作法を勉強したり、住職の法話を聴聞していただき、亡き人が、いったいどこに存在しているのかを感じ、そのことにより、私の後生の解決を確かなものとしていくことが法要の意味なのです。

中陰法要は、亡き人の与えてくれた仏縁です。

大切にお勤めさせていただきましょう。

水が出ることは当たり前なのか、それとも有り難いことなのかという感覚の違いは、自力の念仏と他力の念仏の違いに通じる部分があります。

つまり、この私がお念仏をお称えするのは、あくまで私の意思に基づく私の行為と解釈するのか、それとも、この私をお念仏をお称えする人間へと育てあげようとする阿弥陀さまの願いでありおはたらき

であると解釈するのかという違いに似ているのです。

お念仏をお称えするのは私の行為なのか、それとも阿弥陀さまのおはたらきなのか。この解釈の違いは、阿弥陀さまの願いがなければ、はたして私はお念仏をお称えするような人間であるのだろうかと思いを巡らすことから生じます。結論を言ってしまうと、自分の力でお念仏をお称えしていると思っている限り、阿弥陀さまのおはたらきに思いが至ることはありません。これは、先ほどの水でたとえるなら、水道の蛇口から水が出ている状態を見ても、その背後にある水源や水道管の存在に思いを巡らすことができなければ、「蛇口から水が出ているなあ」という表面的な感想しか出てこないのと同じです。自分は自分の力でお念仏するような人間ではないというところに立てたとき、自分のお称えするお念仏に阿弥陀さまのおはたらきを感じることができるのです。それは、水道の蛇口から出る水を見て、水源や水道管の存在に思いを巡らせることができるようになったときに初めて、「ここに水が出るためにはさまざまなお縁と色々な方のご苦勞があったことだろうなあ」と、その事実を深く受け止めることができるようになるのと同じであります。このように、私の姿を仏法を通して深く見つめ、自分のお称えするお念仏に阿弥陀さまのおはたらきを味わうことができるようになることを、「お育てをいただく」といいます。

私も最初、お念仏は自分で称えているとしか理解できなかったのですが、いつのまにかお念仏に阿弥陀さまのおはたらきを味わうことができる身へと育てられています。思えば本当に不思議なお縁です。

親鸞聖人が大切になされたのは自然法爾の教えで、あるがまま、煩悩具足のままで救われると説かれました。

親鸞聖人は、お手紙のなかで「自然の自はおのずからということであり、人の側のはからいではありません。然とはそのようにさせるという言葉であります。そのようにさせるというのは、人の側のはからいではありません。」と書いておられます。

地球は人間のものではなく、地球の上に人間が住まわせてもらっています。

このことは、まさに自然です。

私というのちは、私たちの努力や忍耐で思い通りになるものではないということです。

でも、このことは、頭でどれだけわかっているか、思いに反した真実が届くと、とても辛いということです。

いのちの真実を受容するには、辛い涙を流さなければならないこともあることを教えていただいたのです。

地球に住まわせてもらっている人間にとって、地震は避けることのできない地球の活動です。火山の国である日本は、歴史のなかですべての地方・地域が、地震に見舞われているのではないのでしょうか。

地震は無くすことはできません。

地球で生きていくかぎり、地震を受け入れ地震があることを前提に生きていくしかありません。

地震に倒れない建物や倒れても危害が及ばない建物を工夫して生きていくしかないのです。

地球といういただきものの星で生きていくということは、そういうことです。